

「救いの顔」

民数記6章22-27節

みなさんが一番最近、赤ちゃんを見たのは、いつでしょうか。

大人の腕に抱かれてスヤスヤと眠る赤ちゃん。

あるいは「おぎゃー」と泣き出す赤ちゃん。

あるいは「あーうー」と語り出す赤ちゃん。

その全てが微笑ましいものだと思います。

見ているこっちも思わず笑顔がこぼれ出てしまう。

そんな経験をみなさんもされてきたのではないのでしょうか。

神の独り子は、赤子になりました。

イエスさまは赤ちゃんとなってこの地上に来られました。

わたしたちに笑顔をもたらすためです。

わたしたちの心に温もりを取り戻すためです。

わたしたちを照らす真の光として、救い主がこの地上に来られた。

救い主がやってきた。

この赤ちゃんとなられた神の独り子の訪れに、クリスマスの喜びがあります。

この喜びを共にお祝いしましょう。

イエスさまがお生まれになったのを初めて目撃したのは、

イエスさまを身ごもった母マリア。

そして、その夫であるヨセフの2人です。

彼らがイエスさまを見たのは家畜小屋でした。

宿屋はどこも満員で止まる場所がなかったからです。

家畜小屋でしたから十分な灯りもなかったでしょう。

ささやかなランタン程度か、もしくは下手をすれば月明かりや星明かりのみです。

そんな薄暗さの中でイエスさまはお生まれになったのでした。

イエスさまの誕生には、現代のような、きらびやかなイルミネーションはなかったのです。
よく絵画などで描かれるイエスさまの背後には「光」が広がっています。
後光（ごこう）が差しています。そういう赤ちゃんのイエスさまの作品をよく見かけるのですが、
聖書には、その「後光のような光」すらも書いていないんです。そんな薄暗さがある。

でも、だからでしょうか。よく映える「光」があります。
それは、イエスさまの顔、「御顔（みかお）」です。
もちろん、顔がパカパカと光っていたのではありません。
でもこの飼い葉桶で安らかに眠るイエスさまの御顔にこそ、マリアとヨセフは「光」を見ました。

今日、共に耳を傾けた聖書の言葉は、こう告げています。

**「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。
主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みをあたえられるように。
主が御顔をあなたに向けて、あなたに平安を賜るように」**（民数記6：24-26）

マリアとヨセフは、このイエスさまの御顔にこそ、「祝福の光」をみたのです。
神さまが、こちらに顔を向けてくださっている。
神さまは、そっぽ向かれてはいない。
その顔を、決して隠してはおられない。
安らかに眠るイエスさまの「御顔」は、
どうして彼らにとっての「祝福の光」となったのでしょうか。

……。

……新型コロナウイルス感染症の大流行以降、いわゆるポスト・コロナの時代になって。
わたしたちは互いの顔を見る機会が、極端に減ったのではないかと思います。
マスクで顔を隠し合うのが普通となった。
もちろん、お互いを守るためです。
だから、マスクを外して素顔を晒すことが恥ずかしくなった。
そんな声も聞こえてくるようになりました。

でも一方で、「本当にそうかな」とも思います。

わたしたちは、たとえマスクを外していても、自分の素顔を隠してきたからです。

自分で顔の筋肉、表情筋をコントロールして顔を作ります。

苦しいときでも笑顔。

悲しいときでも笑顔。

あるいは、そうやってどんなときでも前向きに生きることが、よしとされることがあります。

太陽のような明るい人になりたいと憧れを抱く人もいる。

しかし、それゆえにでしょうか。

世に出ると、顔が疲れて引きつってしまうという人もいる。

お互いが、お互いの本音を明らかにすることができない。

顔を向け合ってはいるけど、本当の「顔」を隠している。

こわばった「笑顔」のマスクをつけつづける。

石のように顔をつくるがあまり、心までもが石のようになってはいないでしょうか。

あるいは、自然な笑顔を交わす、あたたかな心の交流を失い、心が凍てついている。

そんな心地がしていないでしょうか。

……………しかし、です。赤ちゃんは「顔」を作れません。

だから、嘘偽りのないまっすぐなコミュニケーションです。

心地よければ笑うし、不快なら泣く。

でもだからこそ、飼い葉桶で眠るイエスさまにマリアたちは祝福をみたのだと思います。

神さまであるイエスさまと一緒にいて、安心してくださっているからです。

いや、こうも言っていないかもしれません。

安眠できるほどに、神さまはマリアとヨセフを信じておられるのです。

イエスさまの「御顔」はまっすぐに物語ります。

「あなたと一緒にいれて嬉しい」と。

「あなたと一緒にいれて安心できる」と。

神さまがあなたと共にいてくださることを喜んでくださっている。

そこには「光」があります。

凍てつきこわばったわたしたちの顔を、やわらかな笑顔にする暖かな「光」です。

冷え切った心を溶かす「温もり」です。

人から信頼されるために、ぼくたちは「顔」をつくってきたかもしれません。
それゆえに、その笑顔とは裏腹に、その心で数え切れない涙を流してきた。
いや。もうその「心の涙」すらも枯れきってしまっていたかもしれません。
そこに言い難い疲れをおぼえていたかもしれません。

でも、飼葉桶のイエスさまは語ります。

「あなたと一緒にいると安らげる」と。

イエスさまは、「あなたの腕に抱かれていたい」という。

「あなたと一緒にいたい」と言ってくれる。

もちろん赤ちゃんのイエスさまは語れません。

でもその御顔をもって語りかけてくださるのです。

「あなたと一緒にいれて嬉しい」

その御顔こそが、わたしたちの救いです。

わたしたちもかつては、無邪気に泣いて笑っていました。

でもいつからでしょうか。

わたしたちは「人の顔色」をうかがって生きるようになっていました。

人の顔色をうかがい、自分の顔をつくる。

お互いで顔を隠し合い、心を寒々しくこわばらせていました。

だからこそ聖書は、伝えます。

「神さまの御顔をこそ仰ぎみなさい」と。

そして、神さまの御顔を見ようとせず、

人の顔色をうかがって生きることを聖書は「罪」といいました。

イエスさまは、この罪からわたしたちを救うために、この地上に来られて伝えるんです。

「あなたと一緒にいれて嬉しい」。

あの安らかな御顔をもって語られるのです。

その神さまの温もりを伝えてくださる。

クリスマス。

わたしは、泣いてもよいと思います。

教会に来てまで無理に「喜ぶ」必要はないと思います。

世の中で顔をひきつらせるように「笑顔」を作らないでいい。

世で受け容れられない「つらさ」。

この世界から見放されているような「寂しさ」。

神さまからもそっぽ向かれてるような「苦しさ」。

それらを表情筋で、全部おおい隠す必要は無いんです。

そんなマッコヨにならなくていい。

でも、あなたが見つめるべきは、世の人の顔じゃない。

この「イエスさまの御顔」です。

飼い葉桶にスヤスヤと眠るイエスさま。

あなたのところにイエスさまが安らかにおられる。

このお方の御顔こそを、見つめてほしいのです。

「神であるわたしは、あなたと一緒にいれて嬉しい」。

直球でそう伝えてくださるお方が、今もあなたと共におられるのです。

あなたに自分自身の命をたくして安らかに眠るイエスさまがおられるのです。

「神であるわたしは、あなたと一緒にいれて嬉しい」。

この出会いの喜びを。その光。温もりを。たとえ死んでも変わらないものとするために、

イエスさまは大人になってから十字架で苦しみ死なれ、復活されたのです。

最後にもう一度み言葉に聞きます。

「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みをあたえられるように。

主が御顔をあなたに向けて、あなたに平安を賜るように」(民数記6：24-26)

世の光となられたイエスさまが、いまここにおられます。

その御顔を共に仰ぎみ、賛美をささげましょう。

共に祈りましょう。

憐れみ深い、わたしたちの父なる神さま。

世の顔色をうかがって生きては疲れ寒々しさをおぼえていたわたしたちでした。そのようにあなたの御顔に背いて生きるわたしたちに、あなたはしかし、イエスさまをあたえてくださいました。わたしたちの腕の中でスヤスヤと眠るその御顔から、あなたの深い信頼を、愛を聞くことができました。感謝をいたします。どうぞ、このクリスマス。御子の御顔をあおぎ見ることができますように。あなたの御顔の光で照らしてください。心からの笑顔を、その温もりある心を取り戻して歩むことができますように。

わたしたちの救い主、イエスキリストの御名によって祈ります。アーメン。